

【ものづくり 人づくり 地域づくり】福島は今 (2)、樋口健二さんの「被曝労働者」上映会

福島は今・・・(2)

二重三重に分断され、 残るも地獄、避難先でも地獄

福島で聞いたお話しはとてもショックでした。

現地に残った人々、避難してきた人々の中の亀裂。カネで巧みに住民の分断を狙い、逆らう者にはレッテルを貼り風評を流す。同じ仮設住宅の中で、津波で家を流されて補償もない人と東電から補償をもらった人の間の喧嘩。いくらもらったかをめぐる疑心暗鬼……。医療生協の職員はその仲裁にたいへんな労力をさかれる。

その周りには在住者と避難者の間に繰り広げられる軋轢。ゴミの出し方のトラブルひとつから「非難民帰れ!」「避難者は東電からカネもらって、何もしないでいて裕福」と。

子どもたちの教育とは言えば、避難地域の高校は解体同然。サテライト校と言って名前だけ残している。浪江では小学校入学児は17%。子ども達は全国690校に分かれていった。学校を取り上げられ、友達を取り上げられ、先生をとりあげられ。

3/31 ~ 4/1
東海第二訴訟団福島現地視察

いわき市民への東電からの慰謝料は一律8万円。金額の書かれた請求書が一方向的に送られてくる。我々は愚民か……。元の生活を戻してもらいたいだけ。

元に戻るなら東電からお金なんか一切欲しくない。あと1年で消滅時効。それまではいかに分断して補償を少なくするか。3年たったあとは、気の毒だから「くれてやる」という態度。異を唱える人間にはレッテル貼り。福島県民は二重三重に分断され、住民どうしをいがみ合わせるやり方の渦の中に。

事故はもう終わったと。忘れ去られてゆくことの虚無感。まだ騒いでいるの?と。それでいて福島産の野菜もお魚も白眼視され、買い叩かれ。同心円の距離で分断され、次に放射線量で区別され、賠償で分断され、県民の心は何重もの葛藤と対立でねじまげられる……。

安置所の遺体死亡診断書には「死亡推定月日3月22日」。
死因は水死ではなく衰弱死と。助けに行けなかったのが今も悔しくて……。
昔からの家に3世代いっしょに暮していたのに、
今は家族みなバラバラ。
仮設住宅4畳半に閉じ込められて……。借上げはアパート。
避難区域の再編で、また「帰る、帰らない」の争い。

ここから先は帰宅困難区域
悲しく咲く福島富岡町「夜ノ森(よのもり)の桜」と「封鎖線」

あいつはカネをもらった! ウチはもらえない、いくらもらった……。
避難民は町から出ていけ! 迷惑だ!
今までだってイイ思いしてたんだろ?
もう帰れるだろう。東電から補償もらったんだから。
あと1年で「時効」。それまではうんと制限。
3年たった後は「気の毒だからくれてやる」。恐ろしき東電。

福島県民がまだ騒いでいる。補償裁判まではじめた……。
なんでそんなにカネが欲しいんだ。国のカネは税金からだろ!
福島産なんて怖くて食べられない!
原発が止まったままだから電気代が上がるんだ!
国民的圧力がかかる。
避難先でも息を潜めてひっそり暮らすしかない……。



【訂正】東海第2原発差止訴訟第2回口頭弁論(水戸地裁301号大法廷)は4月18日(木)が正しい日程です。(誤:4月17日)

1/26 樋口健二さんのDVD「被曝労働者」上映会



脱原発と暮らし見直し委員会 憲法チームでは「隠された被曝労働～日本の原爆労働者～」DVD上映会を1月26日(土)に行いました。厳しい内容の上映会にもかかわらず、22名の方がお集まりくださいました。

(ごあいさつ)

みなさんこんにちは。脱原発と暮らし見直し委員会、憲法チームの都留です。

私はチェルノブイリ事故の2年後、アイルランドの日本人学校に務めることになりました。

チェルノブイリの事故当時、私の回りに関心をもつ人はおらず、チェルノブイリは全く遠く離れたところでの出来事にしか思えませんでした。それでも、ヨーロッパに暮らして大丈夫なのかな?と少し不安になりました。

そんななか、本屋で岩波ジュニア新書の樋口健二著『これが原発だカメラがとらえた被曝者』が目にとまりました。読んでみて、危ないのはチェルノブイリばかりかと思っていた私は驚きました。現に今、自分が日本で使っている電気の元をたどっていけば被曝労働という実態があるというではありませんか。日本の原発で、命を削っての作業が日常的に行われているという事実には衝撃を受けました。

幸い、アイルランドでも、また翌年住んだイギリスでも、一度もチェルノブイリのことを耳にすることはありませんでした。

一度、イギリスで道に迷ったとき、巨大な原発にでくわしたことがあります。荒野のなかに忽然と現れた原発は、全く異様な姿で、思わず背筋が寒くなりました。すさまじく巨大な煙突からモクモク水蒸気を吹き上げています。みるからに危険物。つくづく「日本は頭がいいな」と思いました。日本の原発は全然危険そうに見えないからです。

いかにもクリーンエネルギーで、安全です、という感じ。2年後、日本に帰国しましたが、飛行機が成田に近づいた頃、日本政府からの警告文を渡されて、衝撃を受けました。

「アイルランドに居住した日本人は、チェルノブイリの影響があるので、帰国後献血しないように」。

まったく、行くときにはなにもいわなかったのに。だまし討ちに遭ったような気分でした。絶対に献血なんて

●樋口健二氏「被曝労働者」上映会

脱原発と暮らし見直し委員会 憲法チーム
(都留・菅沼・清水・中川・青柳)

観た人はみーんな命に涙しました
知らなかったでは済まされないことを知らされました

どうしても伝えたいこの事実
どうしても知ってほしいこの現実

人が人でなくなる社会のあり方、生きる生き方がなくなる矛盾
自然破壊、人間崩壊へ向かう原発のこの現場を
大人みーんなの責任でなくそうよ

未来の子どもたちのためにしてはならないこと
子どもたちの未来をなくすことはしてはならないこと
原発はなくさなければならない
どうしても原発をなくしたい

するものか、と思いました。

帰国後、樋口健二さんのこの作品を知りました。NHKで放送する予定だったのが、そうはいかなくなってBBCで放送したとのこと。日本のことなのに、日本人には知らされず、関係ないイギリス人はテレビで見ているとは。隠されてみえないところに、実は想像もつかないようなとんでもない真実があるのだとつくづく思います。そんな思いを、1人でも多くの方と共有できたらと思い、ビデオの上映会を提案させていただきました。

かつてNHKが、このドキュメンタリーと同様の番組制作に取り掛かったが、実情を知った上層部がつぶしてしまったことがある。もし実現していたなら日本人の多くが原発被曝労働者の実態に目を見開いたことだろう。

このDVDは、1995年に作成されたものですが、今まさに福島では今までの何倍もの方が原発被曝労働者となっているのではないのでしょうか。参加された皆さんから真摯な感想をいただきました。

「隠された被曝労働～日本の原爆労働者～」
に寄せて 樋口健二

原発被曝労働者にとって、被曝することはそれ自体が労働の本質でありノルマですらある。原子力産業はある一定の労働者が死んでいくことを前提にして存在する。労働者の使い捨てによって成立しているといっても過言ではない。被曝労働者は生きていく限り発病の恐怖の中で無権利状態に放置され、その実態は、あたかも現代社会の恥部であるかのごとく闇の中に隠されている。
[DVD添付資料より]

○憲法チームは参加人数を心配していましたが組合員だけで、22名参加して下さりありがとうございます。1995年、イギリスで放映されたドキュメンタリービデオ「隠された被爆労働」の実態を見て「ショックです」と言われた方が多数いました。便利な生活が弱者の犠牲で成り立っている現実（ピンハネによるピラミッド構造等）を変えていかないといけないのでは。1995年の撮影なので今はもっとひどい状況の中で働いているのでは。廃炉までの仕事を誰かしないといけない。現実をもっと知らないといけない等の感想が聞かれました。知る機会をもっと作って欲しいという意見も頂き励みにもなり、今後の企画を考えていきたいと思いました。生協の職員（特に柿崎さん）に大変お世話になりました。ありがとうございました。（牛久市 青柳 J）

○今まで日本は中国や北朝鮮の事について事実を隠す国だと報道してきました。私も隠蔽は他国に起こる事と（信じきっていました。ところが3.11で他国に勝る!! 隠蔽国だと分かり失望させられました。今回上映したフィルムも日本では未放映と知りショックです。草の根運動的に細々とでも周りの人達に知らせる機会を作らないといけないのかな・・・と思いました。また理事長さんの熱いお言葉に心がふるえました。原発、放射能を心配するママ達は、最近「何をしても変わらないんじゃないか?」と士気が上がらなくなる事が多々あります。しかし、理事長さん始め自ら行動をしている方達を見ると勇気が出ます。また、こういう機会を作ってください。とても良い会でした。どうもありがとうございました。（我孫子市 鈴木 J）

○原発が存在する限り、被爆労働者が存在し、その犠牲のもと電気が使えることを祈りました。参加された方の意見で、原発を廃炉するときにも被爆者はでるということを聞き、人間はおかしてはならない過ちを犯してしまったのだと感じました。隠された真実を知ることができ勉強になりました。（守谷市 山本 I）

○今回2回目です。1995年につくられていながら、放送しなかったNHKの罪は大きいと思います。これを見た人は原発で働こうなんて考えないでしょう。感想も全て重い意見でした。特に今後廃炉作業が始まったら、人手はいくらあっても足りない。被爆者がたくさん出る訳です。50歳以上の人、あるいは退職した人の再就職先としてやっていく。若い人は働いてはいけない。遺伝子が傷つくことは個人の問題ではありません。すでに原発で働いたOBの方々から呼びかけの声が上がっています。50年間無事に暮らしてきたのだから、第二の人生を廃炉作業にかけるとおっしゃっています。学徒出陣や特隊の誤ちだけはしてはいけないと思います。子や孫に「原発で働いてはいけない」と言い続けましょう。憲法と結び付けて、話し合う時間はありませんでしたが、「憲法さえ守れば、全ての問題が解決できるはずだ。」と感じてきました。憲法は政府が悪さないように歯止めをかけるものです。



自民党の立党の精神は「憲法改正」だったそうです。立党宣言の中には「原子科学の発展と共に・・・」という言葉もあります。昭和29年生まれでしょうか？上映会を前に知ったことが色々ありました。（坂東市 清水）

○このような映画を見たのは初めてですが、有りうる事だろうなと。チャンスを作ってくださった憲法委員会の方々へ感謝！原発は、ひどい社会的格差が利用されて、地域が豊かになるには原発以外に方法はないと思われて、54基も作られてしまってきた。確かにそれぞれの地域は飽をもらっている。事故が起こって、避難が始まったとき、東京でもつくばでも、誰が流したのか「あの人達、いい思いをしてきたのよ。」と。福島の人たちへの寄せる思いをかき消すように流されてきた。事故被害のあまりのひどさにだんだん消えてはいったけれど。原発にはいつも格差が付きまとう。放射能の危険性を正しく知らせない。福島で事故後放射能の危険性をどれだけの人が認識しているのだろうか。認識したとしてもどれだけそれを口に出しているか。情報を得るにも格差がでる。ネットで正しい情報を得られる層が今どれくらいいるのだろうか？「福島でも自民党の圧勝」とあきれたけれど、考えてみれば、遺族年金とはいえ、ささやかに安定した日々の糧を得られている自分には福島の人を批判できる立場にはないと思った。事故の後、程度はいろいろでも、家族を抱え、収入の道を失い、安定して住める場所も得られていない福島の人たちが、情報も十分でなく、選挙の甘い言葉に”夢よう一度”と思いたくなっても。危険極まりない核ごみを増やさないために、原発をなくしていかなければならないことは、はっきりしている。廃炉となればたくさん原発労働者が必要になるだろう。今でさえ原発労働者は被曝の危険も知らされず、人間性を無視された状態なのだから、廃炉が決まって、原発推進派にとってメリットのなくなった時、見えない場所で原発労働者がどんな非人間的な労働が強いられることになるのだろうか？（つくば市 木村 S）

○3.11の震災後、被災者と被災地域の生産者を継続的に支援し、また放射能汚染に関する様々な問題にも精力的に取り組んでいる茨城県の常総生協で、DVDの小さな上映会がありました。

隠された被爆労働～日本の原発労働者～
「フォトジャーナリスト樋口健二さんの目を通して原発労働者たちを追ったドキュメンタリー」

この催しは、生協理事さんたちの脱原発委員会の「憲法チーム」が憲法について学んでいる過程で出逢い、避けて通れない問題だったという説明がありました。

私を上映会に駆り立てたのは、樋口健二というジャーナリストの名前でした。原発労働者を40年近く撮り続けてきたフォトジャーナリスト樋口健二さん。震災のあった2011年、日本版ピュリツァ賞と言われる「平和・共同ジャーナリスト基金（PCJF）」の第17回大賞を受賞された方です。

氏について初めて知ったのは昨春のこと。私が代表を務めている学習サークルJSMで、6月に古民家を会場にしたコンサートを催しました。出演して歌ってくださったのは、直前の4月に柏のホテルで記念リサイタルを抜いたばかりのエイコさんです。（結婚記念日だったか、誕生日だったか？）

エイコさんはプロではありませんが、中国の抒情歌を言語で、また日本の抒情歌も美しく歌い上げて、大変盛会なコンサートでした。その同じコンサートに、エイコさんの発案で、ある詩人の方をお呼びして詩の朗読もしていただいたのです。

詩人の鈴木文子さんは長く野田市でご活躍された方で、近年エイコさんの住む街へ移住されてからのご友人だそうです。

鈴木さんはたくさんの作品を発表されていて、受賞作品も多数に上りますが、1992年刊行の詩集「女にさよなら」で第20回壺井譲治賞を受賞されています。（壺井譲治氏は、「24の瞳」著者・壺井栄の夫）

その鈴木文子さんが樋口健二さんの写真集に出会い、綴った詩があります。「夏を送る夜に～原発ジプシー逝く～」（「女にさよなら」に収録）です。

樋口さんの写真から、暗闇の深い底に押し沈められた被写体の様々な想いをひとつひとつ忠実に拾い起こして言葉に紡いだような詩です。悲しみを超越した詩念の重たさが更に哀しい。（守谷市 稲葉）

○1/26ビデオ上映会に参加させていただきました。いつもありがとうございます。チェルノブイリ事故後、牛乳にセシウムが含まれていると、一番早くに知らせてくれたのが常総生協でした。手書きのお知らせに、わかりやすく記入してくれました。他の生協は、もっと日数が過ぎてから、小さな字で見落とすようなお知らせでした。その時初めて、生協の牛乳の牛達は、外で草を食べ水を飲み、日本の草を食べているという姿を想像しました。そして、大手牛乳メーカーの牛達との管理の違いを感じました。

3.11より、いくつかの講演会にも参加させていただきました。正直、3.11後すぐにでも、遠くへ避難したかったのですが、経済的に無理だとわかりました。子どもだけでも・・・と考えましたが、もう仕事を持っている成人した子どもです。避難は無理だと言われました。それでもこの地で生きていけるのか？まだ、自問

自答する日々です。1/28（月）AM0:50～日本テレビで「米国・原発廃炉の真相」を放送していました。やはり夜中ですね。

「真実の危険」を隠し続けていますよね。本も色々読んでみましたが、他人にこの危険を説明するのは、難しいし、自分の考えをまとめることさえうまくできません。記憶力も衰える年ですし・・・。講演会や上映会等に参加するのは、そんな忘れっぽい自分のため、もっと知りたいと思うし。それから、若い人にドンドン参加してほしいので、自分が参加することで、少しでも参加する人が増えてほしいという思いもあります。

説明するよりも、見てもらえばわかってもらえると思うからです。若い人には、「鎌仲ひとみ監督」の作品も、とても良いと思います。東海村で、低レベルの汚染コンクリートを再利用したという話をききましたが、本当でしょうか？これからの「食の安全」をどう守るのか？不安です。今も・・・カタログに、放射能測定値を記入してくれて、ありがたく思っていますが、遠くのもの？とか、まだまだ不安のまま、悩みながら注文しています。（取手市 狩野）

○今までは活字として知っていた事が多く、実際の映像を見て、よく頭に入った考えさせられる映画でした。これからの事、何から行動したら良いかもやや感で消化不良の思いです。これからも、DVDを通してでも、繋がっていったらと思います。（取手市 山成）



2011年12月、平和・協同ジャーナリスト基金授賞式。樋口健二さんが大賞を受賞した時、常総生協も奨励賞を頂き、樋口さんとごいっしょさせて頂きました。これも何かの縁ですね。そして今年6月守谷で開催される母親大会にも樋口さんが来てくださるとのこと。

先日、平和・協同ジャーナリスト基金の岩垂さんよりお手紙を頂きました。

3月9日、明治公園で開かれた「つながろうフクシマ！ さようなら原発大行動」をのぞきましたら、「常総生協」ののぼりが立っていました。貴生協の脱原発に向けての活動の一端にふれ、とてもうれしくなりました。貴生協の活動に改めて敬意を表します。原発推進派による巻き返しが勢いをましております。皆様方の運動が広範な市民の支持を得ることを切に願っております。敬具
PCJF運営委員 岩垂弘 大石様

ちゃんと見て下さっていただいておりますね。